

Title	大学院学生(I 研究所の概要)
Author(s)	
Citation	霊長類研究所年報 (1975), 4: 20-20
Issue Date	1975-01-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/162604
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

利用研究員である森治・和田久氏らとともに足沢および東滋が参加した。

昭和49年度より向う10ヶ年間の青森営林局下北地域施業計画区、第2次地域施業計画の策定に当って、下北半島のニホンザル生息地（研究林予定地）が含むべき施業要件について意見を求められ、数次にのぼる参考意見の具申と調整がおこなわれた。

下北研究林地域のニホンザルとその生息地の森林の保全のための基礎的条件を把握するため、森林経営学・森林生態学・霊長類生態学の協同作業として、下記のような内容の継続調査を本年度から開始した。

下北半島における森林施業がブナ・ヒバ林生態系に及ぼす影響に関する研究

1. 森林施業とブナ・ヒバ林の動態分析

四手井綱英・堤 利夫・森田 学
萩野和彦（以上、京大・農）

ここでは、森林施業とりわけ択伐施業の対象となったブナ・ヒバ林の動態を生態学的・経営学的に考察する。このためいくつかの林分において、①施業前・施業後の、林分構造の変化を分析し、比較検討するとともに、②過去における施業内容について、技術史的見地から考察を加え、現在の林分構造をどのように規定しているかを明らかにする。

2. 森林施業とニホンザルの生活維持

東 滋・和田一雄・杉山幸丸
足沢貞成（以上、霊長研）

ニホンザルの行動圏全域にわたり、それぞれの群れの生活様式を分析し、森林施業にともなうブナ・ヒバ林の構造変化のもとで、ニホンザルの生活がどのような影響をうけるかを、①個体群動態との関連において、②生活環境としての林分をどのように利用するかなどの点を、特に明らかにする。

（川村俊蔵・東滋）

大 学 院 学 生

昭和48年度における京都大学大学院理学研究科動物学専攻霊長類学専攻の学生、指導教官および研究テーマはつぎのとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
渡辺邦夫	M2	川村俊蔵	ニホンザル個体間の反擬関係と介入行動—福岡県高浜町音海A群について
佐藤 俊	M2	河合雅雄	ニホンザル自然群のオスの生活史—特にオスどうしの結びつきに焦点を合わせて

平石邦義 M1 川村俊蔵 東中国山地における哺乳類の分布と保護（川村俊蔵・和泉剛と共同）

菅原和孝 M1 河合雅雄 ニホンザル自然群における個体関係より見たオスザルの周辺化の過程の解析—特に態度の問題を中心として

松村道一 M1 久保田競 霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の解析

所 内 談 話 会

昭和48年度には所内談話会が5回開催された。以下にその概要を記す。

第1回 1973年5月9日（水）

「インド霊長類調査隊帰国報告」

杉山幸丸・和田一雄・小山直樹

1972年8月から1973年2月までの約6ヶ月間、演者らはインド各地で狭鼻猿類の社会生態学および動物地理学的な研究を行なったのであるが、その研究の概要がスライドを使用して発表された。杉山及び和田は主として標高2,000mのクマオンヒマラヤ山麓のシムラを中心にハスマンラングールとアカゲザルの調査を行ない、小山はインド中西部のマカク属2種（アカゲザルとボンネットザル）の分布の調査を行なった。

第2回 1973年10月1日（月）

「動物および人間の性行動」

朝 山 新 一（日本性教育協会）

演者は、大阪市立大学名誉教授であり、日本性教育協会常務理事であるが、「日本のキンゼー」と呼ばれているように、性の研究に関して深い洞察眼を持った発生学者である。動物と人間のちがいを、性行動という観点からお話いただいたのであるが、特にヒトに近いサルの研究をしている当研究所には、以前から強い関心を持っておられたとのことである。なお同時に上映された映画のタイトルを下記に掲げておく。

1. 'Animal composite'（キンゼー研究所）
2. 'End of term'（キンゼー研究所）
3. 'Samlag'（スウェーデン性教育協会）
4. 'Premiers jours de la vie'（フランス）

第3回 1973年12月6日（木）

「精子形成の kinetics — 牛、ミンクからサルへ」

千葉 敏 郎